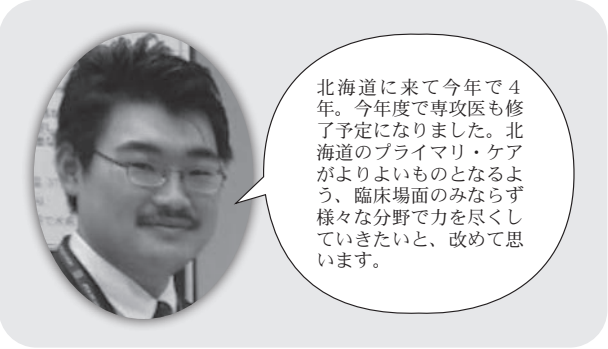
Actions
アクションズ
若手医師活動報告

専攻医という立場から ～日本プライマリ・ケア連合学会 専攻医部会の活動紹介を兼ねて～

北海道家庭医療学センター 若草ファミリークリニック
八嶌（やしま） 駿（しゅん）



私は総合診療専門医・家庭医療専門医の取得を目指して現在研修中の専攻医です。私がこの場をお借りして、私の所属する日本プライマリ・ケア連合学会（JPCA）の専攻医部会についてご紹介いたしますのは、実はこれで二度目です。約一年半前に一度ご紹介させていただきました。その後、縁あって今年７月まで専攻医部会の代表を務めさせていただきました。今回あらためてJPCA専攻医部会の活動をご紹介させていただくとともに、専攻医についても少し触れようと思います。

JPCA専攻医部会は「専攻医による専攻医のためのサポート組織」をモットーに、学会認定家庭医療後期研修プログラムの全ての専攻医と、学会会員である日本専門医機構認定総合診療専門研修プログラム専攻医を部会員として活動しています。家庭医療学・総合診療専攻医が専門医資格を取得するために必要な知識、技能、経験を得ることや、世代や診療科、さらには国を超えた連携・交流により、多様な視点・経験を得ること、そして研修中の、また研修後まで続く専攻医間のネットワークの構築とキャリアの支援、といったことを活動の目的とし、目的ごとの事業部門に分かれて様々な企画立案と実行を行っています。今年度からは、JPCAの各ブロック支部（全国８支部あります）に専攻医部会の幹事を選出し、各地域の専攻医がより身近に専攻医部会の活動に参加したり、専攻医部会に相談できたりするようにしています。このように専攻医が自主的に運営する専攻医の団体は、私の知る限り各専門領域の学会等では見られないものと思います。専攻医部会は発足して約10年となりますが、部会員へのアンケート調査では部会活動が好評であることも示されており、今後もより充実したサポートを提供できるよう活動を継続していきます。

ところで、昨年度私は専攻医部会代表として、専攻医の目線から専門医制度そのものの運営についても意見を述べさせていただく機会がありました。読者の皆様の周囲には専攻医という立場の医師はどれくらいいるでしょうか。総合病院や大学病院で勤務されている先生方にとっては身近な存在かもしれません。かつて後期研修医とも呼ばれた専攻医は、現在日本専門医機構の認定する専門研修プログラムで研修を行う医師です。ここから少し、今の専攻医事情について記述をしてみたいと思います。多分に私感を含みますがご容赦ください。

私を含め専攻医の多くはいわゆる「ゆとり・さとり世代」と言われる世代の人間が多いです。この世代の特徴として不景気による社会情勢の不安定さから、人生において穏やかさと安定感を求め、コストパフォーマンスや実用性を重視することが挙げられています。個人的には医師としてのキャリア形成においても同様の傾向があるのではと思います。

ある種の自己犠牲を払いながらも専門研修に打ち込み、勝ち得た専門医の資格は栄誉あるもので代え難いもの、という考え方は今の専攻医にはあまり響かないでしょう。むしろ専門医資格は、専門研修という労働の対価として与えられるものである、という考えのほうが同意を得られることすらあるかもしれません。無論、専門医として技量や経験は備えるべきでしょうし、その義務感を感じながら研修に真剣に取り組む専攻医がほとんどだとは思います。一方で、専攻医はどこか冷めた目で自分の労働環境やワーク・ライフ・バランス、専門医取得や維持のコストを評価しています。

私の所属する総合診療領域は専門医機構の定める基本領域の中では最後発であり、大学医局の関与しない研修プログラムが多数あることが特徴的です。また、専門医資格取得後に独占できる業務やインセンティブもありません。なので先述の「今風」な専攻医の意識が現れやすい一面はあると考えます。しかしながら、このような世代感覚とでも言うべき雰囲気はおそらく全科共通のものなのではないでしょうか。もし今の専門医制度が「コスパの悪いもの」とみなされるようになってしまえば、今後専攻医の応募数や専門医の維持率など、目に見える数字にお

ける変化があるかもしれません。

私自身としては、間近に迫った医師の働き方改革や日本専門医機構の本格的な稼働など、今度も流動的な情勢が続くこの間に、若手医師と指導医層の間で、専門研修がどうあるべきなのか、専門医とはあらためてどのような存在であるべきなのか、を対話し、ビジョンを共有することが必要なのではないかと思います。

JPCA専攻医部会では、公式HP(https://www.primarycare-japan.com/)にて様々な活動を紹介しています。総合診療系専攻医の先生方をはじめ、他科の先生にとっても役立てる情報があるかもしれません。よければ一度訪れてみてください。